

渋沢栄一『論語講義』原稿割記（1）

論語総説

笹 倉 一 広

はじめに

筆者は本誌前号掲載の『渋沢栄一『論語講義』の書誌学的考察』において、東京都立中央図書館蔵の『論語講義』の原稿（以下《稿本》と略す）を調査し、次のことを明らかにした。

- ①周知のように、『論語講義』は、最初月刊の『二松学舎講義録』（1912-1915 以下《講義録》）に連載されたのち一書として刊行（1915 以下《旧版》）された。1975 年に二松学舎の記念事業の一環として復刻され（以下《新版》）、1977 年には文庫版（以下《文庫版》）も出版された。一般にはいわゆる渋沢論語の集大成で、渋沢が口（/講）述し、尾立維孝が記録したものと見なされている。しかし、《講義録》のために渋沢が論語の講義や口述をした形跡はなく、実は三島中洲の『論語講義』と渋沢の『実験論語処世談』に主に基いて、尾立が起草したものである。
- ②都立中央図書館蔵の《稿本》は、《講義録》の原稿で尾立の草稿の浄書稿である。全体の約 1/3 まで、渋沢の校閲がなされ、渋沢自筆の書き入れ、削除が残されている。
- ③尾立の起草稿に渋沢が校閲を加えたのち印刷に付す予定であったが、渋沢の校閲は版組に間に合わなかった、あるいは出版後になされたもので、印刷には全く反映されていない。また、後ろ 2/3 には渋沢の校閲の跡はない。
- ④《旧版》発刊の際にも《稿本》に見られる渋沢の書き入れは反映されず、さらに刷りを重ねても渋沢の書き入れが反映されることはなかった。そのため、この事情を知る渋沢の側近は『論語講義』を渋沢のものとは認めていない。《新版》《文庫版》も表記などは改めているが、《旧版》を踏襲しており、現在通行している渋沢『論語講義』は尾立の起草稿のままである。

本割記では、この《稿本》のうち、冒頭の「論語総説」（以下時に総説と略す）について、渋沢の書き入れを翻字し、初めて明らかにするとともに、刊行されている渋沢『論語講義』と、《稿本》や渋沢の書き入れを比較し、考察を加える。

渋沢の「仰せ」

『論語講義』は、大正14（1925）年10月に乾坤2冊の単行本として上梓される以前、大正12（1923）年4月より14（1925）年9月まで毎月刊行された『二松学舎講義録』に12号の休載1回を除き全期間巻頭に連載された。

《講義録》の第1回には、『論語講義』の総説と学而第1第2章の訓読の第1行までの16頁が掲載されている。奥付には4月17日印刷/20日発行とあるので、この日付通りに刊行されたとすれば、遅くとも4月前半には第1号掲載分について、渋沢の校閲を経ている必要があった。

渋沢の同年の日記⁽¹⁾には《講義録》に関係する記載は次の2条が見える。

1月22日「午餐後三島復氏来り、論語講義ニ関スル原稿ノ事ヲ談ズ」

2月25日「尾立維孝氏来り、二松学舎ニテ発行スル論語講義編成ノ事ヲ談話ス」

2月25日は二松学舎出版部開設の日にあたり、尾立はその初代出版部長であった。開設の挨拶と『講義録』の出版打合せを兼ねての来訪であったか。時に渋沢は83歳。二松学舎にあっては舎長の任にあった⁽²⁾。尾立は64歳。二松学舎の創業者である三島中洲の創立当初の門下生であり、二松学舎から法曹界に入り、台湾の覆審法院検察官長を経て大正2年退官。大正7年より二松学舎理事を務めていた。この頃は理事の中でも中心的人物で、二松学舎と渋沢の連絡には尾立が当たり、渋沢も尾立に指示を出していることが日記からも窺える。三島復の没後は学長事務取扱を任されたこともあった⁽³⁾。

《稿本》では総説に先立って、尾立の筆跡（毛筆朱書）で別紙に次のように記されている。（原文縦書き 以下同じ）

先日拝顔の節の仰せに従ひ閣下の口述小生の筆記として總説末
文に此意味を記載仕候
又孔子伝の所々仰せの二事を記入仕候

三月十二日

尾立維孝 維孝印

ママ
渋澤閣下

3月12日に「仰せに」従って手を入れた原稿が出来た、或いはそれを渋沢に呈する準備が出来たということである。「仰せ」のとおり、総説原稿の末尾および孔子伝の部分に、尾立の朱筆加筆が多くなされている。であれば、原稿本文は「先日拝顔の節」以前にすでに浄書されていたことになる。「先日拝顔の節」はいつか。残っている記録だけから見れば上記2月25日となるが、日記の記録以外に二人が会った可能性もないとはいえない。いずれにせよ、3月12日には尾立の原稿、しかも「仰せ」に従った改訂稿はできあがっていた。しかし、手をいれる時間的余裕が1ヶ月弱あったのにもかかわらず、渋沢は校閲を果たせなかったことになる。

《稿本》総説部分の体裁

《稿本》全体の体裁については前稿を参照いただきたい。《稿本》の総説部分は、学而篇以下と同じ体裁の原稿用紙だが、紙質が薄手。また、総説だけは、原稿用紙に一行おきに記されている。渋沢の校閲を考えてのことだろう。

《稿本》の総説部分には以下の筆跡が認められ、この順番で書き込まれたと考えられる。

- ①原稿本文。尾立の手による毛筆墨書。整った文字で原稿用紙のマス目が埋められている。但し、句読点は「。」のみ。1マス使わず、句読点を打つ文字と同じマスに記される。
- ②尾立の毛筆朱書きによる推敲、書き入れ。前述「仰せ」に従った、孔子の伝記部分と末尾に集中する。その他の部分では字句を1・2文字直す程度。
- ③尾立の毛筆墨書による推敲。②の朱書も訂正する。
- ④渋沢の毛筆墨書による書き入れ。変体仮名も多く、崩された文字で記され、時に判読が難しい。

《講義録》の文章と比較した結果、③の段階で組み版用原稿に転記・出版されたと思われ、渋沢の書き入れは印刷には全く反映されていない⁽⁴⁾。

『論語講義』総説 渋沢栄一書き入れ翻字と考察

以下、総説を適宜分割して渋沢の書き入れを翻字し、あわせて考察を加える。
凡例

- 総説の本文底本には『論語講義』の《講義録》を使用した。本来は尾立原稿の総説本文を使用すべきところであるが、原稿と《講義録》の間にはほとんど字句の異同はなく、また世に出た版との違いを考察することに主眼を置いたので、《講

義録》を使用した。句読点も原則《講義録》に従った。原稿との間に見るべき異同のある場合は適宜注記した。誤字脱字の類は一々注記していない。

- 《講義録》は総ルビであるが省略した。漢文部分の訓点も省略した。
- 翻字にあたっては、変体仮名・時に混ざる片仮名は平仮名にし、適宜濁点・句読点も加えた。漢字は一律正字体を用いた。
- 本文への渋沢の書き加えは**太字**で示した。
- 渋沢が削除した部分は〔 〕で括った。
- 書き換え部分については、原則書き換えた後の文字を先に**太字**で示し、削除文字を後に示し、判別しやすいよう“/”を加え、[/]と表記した。

例：此[/是]の時＝「是の時」の“是”を消して“此”に書き換えて、「此の時」

- 渋沢の書き入れで、推敲の跡がみられるものは、最終字句を採った。
- 単語や文節・句の一字または一部の書き換え、書き加えで読みにくくなる場合は、句・文節・単語単位で示した。そのため、一字一句正確な翻字ではない。

例：「孔夫子」の「夫」のみ1字を消してある場合→**孔子**[/孔夫子]

- 筆者が補った句読点は〈,〉〈。〉で示した。

【1】論語の名は漢書藝文志に云く。論語は孔子が**其**弟子や時人に應答し。及び弟子相與に言ふて夫子に接聞せし語なりと〈。〉則ち論語は後世の祖録、語録、問答録の如きものなり。但し書中に〔此の外〕孔子の平生の起居動静若くは處世の**事**[/方法手段]を詳記したれば孔子の言行録と見るも亦可なりと。我邦の石川竹厓曰く。論は議なり説なり。**事物**を〔紬繹ⁱ]討論するなり。語は午なり。言。交午するなり。^{説文}、論難答述なり。其書に名くるの義は。語の字を主となす。凡べて言の以て教となすべき者は、皆之を語と謂ふ。**孔子**[/夫子]平生**其**〔門人〕弟子と言ふは。皆先王の道**なり**[/を語る所以なり]。故にこれを名づけて語と曰ふ。**思ふに**[/此の他。]國語、家語、新語の如き、其義相同じ。〔思ふに〕我邦の源語、平語又は勢語の如きも蓋し此意ならむと。

i 「此熟字ありや否」と横に渋沢の書き込みあるも塗抹。

渋沢栄一『論語講義』は、三島中洲の『論語講義』を襲う部分が多いことは既に多くの研究者の指摘するところである。渋沢と三島は義利合一の点で意気投合尊敬しあう仲であり、二松学舎の創立者三島に請われて二松学舎に関わるようになった

経緯もある。また、三島は尾立の尊敬する恩師であり、渋谷・尾立両名にとって三島の『論語講義』は非常に親しい書であり、渋谷も『実験論語処世談』の中で三島の『論語講義』を引用することもある。

三島中洲の『論語講義』は大正6(1917)年1月に明治出版社から漢文註釈全書第1篇として刊行された。こちら中洲自ら書き下ろしたものではなく、かねて著しておいた論語私録を門人に敷衍してもらい、校閲を加えたものだという⁽⁵⁾。

最初に論語総説を置く体裁は三島『論語講義』に同じ。三島『論語講義』の総説は、「書名」「編者」「三論分合」「新古注」「伝来」と五つの小見出を立てて述べる。この段は細かい言い回しの異同を除き、中洲の総論の「書名」の章をそのまま引き写している。削られた部分⁽⁶⁾はあるが、付け加えられた部分はない。

石川竹厓説の原典⁽⁷⁾を確認することはできなかったが、三島『論語講義』の引き方・改行の仕方では、竹厓の言葉は、「……新語の如き、其義相同じ。」まで⁽⁸⁾、次の「思うに、……」(三島『論語講義』では改行して「按ずるに……」)の句は三島の按語と思われる。渋谷は「思うに」の位置を前に移動させ、最後に「と」を加えているが、これでは按者が正しくなくなる。また、「紬繹」という語に「此熟字ありや否」と書き入れをして後から塗抹している。「紬繹」は三島『論語講義』からそのまま引かれた文字である。尾立の削除した部分について質す書き入れもない。こういったことから、渋谷がとくに三島『論語講義』とつきあわせながら、書き入れを行っていたのではないことが窺える。

この段、渋谷による大きな書き込みはないが、小さいながら注目すべき特徴が一つ見られる。それは、ままだ見落としはあるものの、渋谷は「夫子」「孔夫子」を全て「孔子」に改め、意識的に伝統的呼称を避けていることである。前年大正11年11月に出版された『活論語』⁽⁹⁾は、主に『龍門雑誌』などに発表された、渋谷の論語に関する講演・言及などを纏めて一書にしたものであるが、再録するにあたって、一つ二つ見落としはあるものの、やはり全て「孔子」に改めている。少なくともこの頃までに渋谷は、孔子を使い慣れた「夫子」「孔夫子」と呼ぶのをやめ、意識して「孔子」と呼ぶようにしているようだ。

【2】 論語を編輯せしは、何人なるや。宋の程子は [/ 曰く]。論語の書は有子、曾子の門人に成る。故に其書獨り二子のみを以て尊稱すと云へ。佐藤一齋は [/ 翁曰く]。論語の書は誰の編次する所なるを知らずと爲す。而して我が三島中洲先生は [/ 曰く]。論語の編次は戦國の末に成ると斷案し且つ。其説に曰く。孟子の學ぶ

〔を願ふ〕所は獨り孔子〔/夫子〕に在り。然るに〔/而して〕孟子〔の書〕七篇中〔に〕詩を引き書を引くこと一にして足らざるも〔/ず〕。〔然るに〕未だ嘗て論語を引かざるは何ぞや。〔又たゞに孟子が〕管に引用せざるのみならず。戰國間の諸子百家の説を擧げ論じて而して〔/て、未だ嘗て〕一語も論語〔/之〕に及ばざるなり〔/ず〕。乃ち知る。孟子の時はたゞ其遺説〔/語〕を傳聞するのみにて。論語はなほ未だ編を成さざりしならむ〔/なり〕。苟くも其書あらば、孟子豈にこれを讀まざらむや〔/るを得んや〕。蓋し戰國の末。〔嘗て〕孔子〔/夫子〕を推尊する者ありて。以爲らく。聖人を去ること漸く遠く。其遺書散佚するに幾し。今に於て〔/及んで〕之を輯めざれば。恐らくは遂に泯滅せむ〔/ん〕と。此〔/是の〕時孔門〔/夫子門人〕の子孫〔の〕四方に散在する者、猶能く其祖先の筆記する所を藏し、或ものは三四簡。或ものは五六策〔あり。是に於て〕多方面を探索し、〔彼處に於て若干を得。此處に於て若干を得。〕遂に哀集して編を成す。即ち論語は是なり但し其人の誰なるやは確知し〔/知り〕難しと。中洲先生の説實に〔/蓋し〕その當を得たりと謂ふべし。

i 《稿本》脱字。《講義録》、渋沢書き入れ共に補う。

論語の編者についての一段である。この段もほとんど三島の論語総説の「編者」の章からの引き写しである。三島は有子曾子門人説に対する徂徠の駁説を紹介するが、尾立草稿は略す。

この段、尾立は「佐藤一齋翁曰く。論語の書は誰の編次する所なるを知らず」とひとことで一齋を纏めたあと、以下「三島中洲先生曰く、……」と三島説の引用が始まり段落最後の「……知り難しと。」まで及ぶ。最後に短く「中洲先生の説蓋しその當を得たりといふべし。」と評語が加えられ終わっている。いかにも三島の所説の引用のようであるが、実はこの箇所全て三島の説ではなく、三島が引いた一齋の説、すなわち一齋の『論語欄外書』の文章⁽¹⁰⁾そのままである。尾立は故意か過失⁽¹¹⁾か三島の説のように書いているが、一齋の説と気付かなかったとすれば「論語読み」としてはいささか不勉強といわざるをえない。前の世代の話ではあるが、一齋の『論語欄外書』については猪飼敬所『論語欄外書評抄』や渋沢も師事した海保漁村の『論語駁異』といった批判書が書かれ、論語に関心を持つ学者の間ではよく知られていたものだという⁽¹²⁾。渋沢の論語コレクションの中にも『論語欄外書』は見える。

渋沢の書き入れについてみれば、渋沢もこのことには気付いてはいないようで、

特に書き入れはない。ただ、「三島中洲先生曰く」と中洲の文章（実は一斎だが）であると明示してあるにも関わらず、渋沢はおかまいなしに字句に手を入れている。今日から見れば違和感を覚えるが、当時としてはどうだったのか。例えば、渋沢は『実験論語処世談』704頁⁽¹³⁾で三島『論語講義』総説の同じくこの「編者」から引用しているが、字句に手はいれていない。

三島の総説ではこの後に「三論分合」（現存論語は魯論語・斉論語・古論語を編集したものだという説）を一章割き解説するが、尾立草稿は略す。『実験論語処世談』では「◎論語を読むについての希望」704頁という段で渋沢はこれについて僅かだが言及している。

【3】 論語の書の我邦に傳來せしは、應神天皇の十六年に。百濟^{今の朝鮮}の王仁來りて論語十卷を献ず。皇太子稚郎子就て之を學ぶとありて。皇國の論語學あるは此に始まる。文武天皇大寶元年の學令に鄭玄何晏注を用ゐよとあり。隋唐の制に遵ふなり。學者之を称して古注と曰ふ。後醍醐天皇元弘建武の際。始めて朱熹集注を傳ふ。之を新注と曰ふ。古注家は新注を譏〔/罵〕りて。濫りに高遠に馳せ幽玄に入り陽に儒道を説けども陰に佛教〔/佛道〕を唱ふ。聖人の意〔/教〕に非ずと駁し〔/論じ〕。新注者流は古注を嘲りて徒らに。〔名物〕章句〔の末〕に拘泥して學問〔/學道〕の大本を忘卻し〔/す〕。記誦詞章の末枝に趨りて實學に益なし〔/詞章記誦の屑學問に終り。一身の爲にも國家の爲めにも役に立たず〕と難ず。是れ世に謂ふ所の各其門戸〔の〕に固着せるの謬見なり。但し古注は孔子〔/夫子〕を去ること遠からざ〔る時の作な〕れば、事實に於て眞に近き〔く取るべき〕所少からずと雖も粗大に流れて精神を後にするの嫌あり〔/。一概に棄つべからず〕。又〔/然れども〕新注は専ら學問の實効を治國平天下に求めて自ら空理高論に馳せ卻て〔/修身齊家の實効を擧げんとするには。新注の説に従ふを以て捷徑となす。若し夫れ新注の高遠に馳せ幽玄に入りて、〕實用に適せざる所あれば〔/の點あるは〕、〔往々免れざる所なれば〕、宜しく兩者の長を取り短を〔/之を〕去りて孔子の眞髓を〔/孔夫子を以て〕標準となし。實踐躬行を以て主眼とすべしといふは。〔是れ〕折衷學者の説に〔/唱道する所に〕して。而して余の左袒する所なり。

慶長元和の際藤原惺窩出で。其門人に林羅山あり。徳川家康に用ひられて。其朱注論語に施す所の訓點を道春點^{道春は羅山の名也}と称し。廣く世に行はる。後世羅山の子孫相繼で大學頭に任じ。幕府の文教を掌る。〔則ち〕古來朝廷にては〔。古より〕古注を用ひられしも。幕府〔にて〕は開府以來宋學に據りて〔/を尚びて〕新注を用ゆ。

各諸侯も亦幕府に倣ふて〔/ひ〕皆新注を用ひ〔。以〕て明治維新の時に及べり。

i 新注は：《稿本》有《講義録》無

ここも三島『論語講義』の論語総説の「新古注」と「伝来」の章を部分的に引き写し再構成したものである。

冒頭の「論語の我邦に……」から「……隋唐の制に遵ふなり。」までは三島『論語講義』では石川竹厓曰く、として引かれる引用部分の一部。「古注家は新注を罵りて……」から「……實踐躬行を以て主眼とすべし。」までは三島の言葉の引き写し。いずれも引用であることを断らない。最後の段落は『実験論語処世談』p208「◎徳川時代の儒学」を下敷きに尾立が起草したものとおもわれる。

淡沢の筆は新旧注に対する評を分かり易く書き換え、両者の長所を生かすところに力が入っている。三島の言葉であるにもかかわらず、前段以上に自由に書き換えているのは、引用であることを明記していないからであろうか。

以上までが、論語の書名、編者、成立期、新旧古注、伝来などについての概説であり、殆どが三島『論語講義』の論語総説からの引き写しである。三島の論語総説は以上の点に関するのみで、以下に述べられる孔子の行状などについての言及はない。

【4】更に孔子の人物と〔/人となり及び〕**其經歷とを略述せむに**〔/は如何〕。〔曰く。〕孔子は史記世家に據るに。今を距ること二千四百七十四年前。魯の襄公二十二年に。魯〔の〕國〔の〕昌平郷の陬邑に生れ〔/る〕。初め魯国の卑官となりて〔/は倉庫の役人又は畜産の役人となり〕。皆能く其職務を全ふせ〔/職責を挙げ〕られ〔/たり〕。三十五歳の時。魯の君ⁱⁱ昭公其臣季、孟、叔孫三家と戦ひ打負けて齊の國に出奔せられたれば。孔子もⁱⁱⁱ亦其後を追ふて同じく齊の國に赴かれ〔高昭子が家臣たり〕。齊の景公が其賢を知り將さに尼谿の田^{iv}を以て孔子を封じ大に用ひやうとしたが晏嬰なる者ありて之を拒む因て魯に帰られた〔/還れり〕。四十二^v歳の時昭公齊に客死し定公立つと雖も魯の國は〔魯の〕大夫季氏の管轄する所〔/天下〕となつたに因り孔子は季氏に仕へようとしたが。偶々陽虎といふ者季氏の嬖臣仲梁懷と隙ありて〔遂に〕季氏に反して再び國が亂れて遂に仕ふること能はず〔/仕へず〕。定公の八年孔子五十^{vi}歳の時季氏の宰臣公山弗擾〔意を季氏に得ず〕陽虎に因て亂をなし人をして孔子を招かしむ。此時孔子は往かうとしたが遂に往かなかつた。五十三^{vii}歳の時定公孔子を以て中都の宰となす。一年にして四方皆之に

則る。司空より大司寇に進み定公を掛けて齊景公と夾谷に會し大に國威を揚ぐ。又魯の大夫の政を亂る者少正卯を誅す。三月にして魯大に治る齊人聞て懼れ〔/懼る〕乃ち女樂を魯君に遺る。魯君之を容れて〔/觀て〕政事に怠る。孔子遂に去る。〔嗚呼孔子の志行はれんとして沮止せらる。好事魔多しの喩に漏れず惜しむべき哉。〕其後孔子は諸國を遍歴〔/遍參〕し〔諸國の君に仕へ〕たが何れも其〔/我〕志^{viii}を行ふに足らず。已むことを得ず最後〔/最終〕に生國の魯に歸られたのが哀公の十一年孔子の齡方さに六十八歳の時であつた〔/なりき〕。それより後五年間即ち七十三歳まで〔は〕孔子は全く仕宦の念を斷つて専ら詩書易春秋等の古經典を修め門人を教育して道を傳へられた。之を要するに孔子は六十八歳までは其志主として政治の方面に在りて一意〔/盡瘁せられ。〕周の時代を復興して以て王道を天下に施したいと云ふことに盡瘁〔/熱心〕せられたやうである。

※下線は尾立の朱墨による行間書き加え部分。

- i 其：《稿本》なし。《講義録》，渋沢書き入れ共に補う。 ii 君：《稿本》なし。
- iii も：《稿本》あり《講義録》なし。 iv 田：《稿本》あり《講義録》なし。
- v 『実験論語処世談』では“三”《稿本》は“三”を尾立朱筆で“二”に改める。
- vi 《稿本》は“五十一”の“一”を尾立朱筆で塗抹。 vii 《稿本》では“二”
- viii 《講義録》“其志”

前稿で指摘したとおり、渋沢『論語講義』の起草にあたり尾立が主に使用したのは『実験論語処世談』である。『実験論語処世談』は野依秀市が主宰する雑誌『実業之世界』に大正4年6月から11年9月（大正7年まで月2回刊，8年以降は月刊）まで連載された渋沢の「実験論語処世談」を一書に纏めたもの。連載開始が大正4年であるから、《講義録》との間には8年の「時差」がある。実業之世界社からは同社の雑誌『女の世界』主筆で女性関係の言論活動で有名な青柳有美が渋沢宅に取材に訪れている⁽¹⁴⁾。『実業之世界』には、渋沢と青柳が正座で対座している取材の様子の写真も掲載されている。渋沢の日記には青柳の取材来訪や原稿手入れの事が記録されており⁽¹⁵⁾，こちら『論語講義』への応対と温度差を感じる。

本段は『実験論語処世談』9頁の「◎孔子は如何なる人か」の一章が下敷きになっている。『実験論語処世談』は、話す口調に近い文章であるが、これを『論語講義』ではある程度文章調に書き換えている。孔子の生涯のエピソードも『実験論語処世談』のまま出入りなく元稿は書かれている。冒頭に記された渋沢の「仰せ」に従い、行間に尾立が朱筆でエピソードをいろいろと書き加えている。そのためか、実際に印刷された《講義録》とは文字の異同が若干多い。一度自分の口から出た言

葉の推敲であり、特に渋沢の書き入れに見るべきものはない。

【5】此に由て之を觀れば。〔則ち〕大聖人の孔子にして魯の反臣季氏に仕へやうとし。更らに又季氏の反臣公山弗擾の招きに應ぜんとした〔のみならず〕。殊に諸國を巡歴〔/巡参〕し〔て仕途を求め〕たのは、如何にも〔大義名分を辨へざるやに見ゆ。然れども支那の國體は大に我邦と異り。萬世一系の天子あるにあらざるのみならず。當時戰國の際なれば、必ずしも名分のみに由り難し。〕職を求むるに汲々たるの觀あるも孔子の志は何國にても構はぬ。又何公でも苦しからず。我が〔道とする所の〕王道を行ふ事を得れば足れりと思ひ〔/決心しⁱ〕たるに由るが如し。是れ實に孔夫子が其志に忠なるの致す所にして、周の盛時〔/時代〕を復興し、斯民をして王化に浴せ〔/鼓腹撃壤の樂を享け〕しめたいと。熱中せられたから〔/の〕である。〔其志は〕殊に生國の魯をして周〔の盛時〕に代らし〔/に還らし〕めんと企圖せしも其事齟齬〔/するに在りて。孔夫子の志行はれず〕して魯を去る時には悵爾として〔如何にも〕去り難き趣ありきと〔孟子も傳へて居る〕。孔子〔/孔夫子〕の當日の情緒は〔/當時四圍の情は〕實に察するに餘りありと云ふべし。

i 決心し：《稿本》決し

この段は『実験論語処世談』10頁の「◎其志や察するに余りあり」の段に拠る。全体的に要約して分量を減らしている。

ここには「然れども支那の國體は大に我邦と異り。萬世一系の天子あるにあらざるのみならず。」という非常に皇国史観色の強い言葉があり、通行しているが、渋沢の『実験論語処世談』には全くない一節であり、尾立によって書き加えられたもので、渋沢は塗抹している。「万世一系の天皇/天子」の語は、『論語講義』八佾第3の25章にも出てくる。ロシア革命でのロシア王室処刑を非難して「萬世一系の天皇を奉戴せる我が國民は。かかる惡逆無道の暴舉を見て。不快の念を起こさざる者之れあらざるべし」とある。この章は『実験論語処世談』182頁の「孔子教と国体論」に拠って書かれているが、原載は王室処刑以前の大正5年3月15日の『実業之世界』であるから、当然『実験論語処世談』にはこのくだりはない。尾立の加筆か。この章を含む《稿本》の9号は、残念ながら渋沢の校閲が行われておらず、渋沢の対応を知ることができない。もとより、渋沢も『実験論語処世談』の中では、「孔子教と国体論」で中国的易姓革命に反対の立場をとり、また「明治大帝の懿徳」では明治天皇を堯舜に比して讃え、皇室を敬愛してやまないのだが、ここでは塗抹

している。いずれ指摘することになると思うが、『論語講義』で古歌の引用を尾立が天皇皇后御製に差し替える例などが見られ、『論語講義』には尾立に由来する皇室傾斜の書き加えが多々あると思われる。また、印刷には至らなかったが、後掲【13】には「国を富まし国を強くし」の箇所を尾立が朱筆で「国を富まし[・]兵を強くし」に改めている例などもある。

【6】或は孔子〔/孔夫子〕が六十八歳の老境〔になる〕までも政治〔上〕に戀着せず。早く自ら斷念し〔/あきらめ〕て。門人や後進の教育に力を盡し。以て道を傳へたならば〔/方が〕、孔子〔/孔夫子〕自身の爲めにも天下の爲めにも利益であつたらうと批評する〔/云ふ〕人もあらむ〔/ん〕。如何にも一理あることなれども〔/さうであつたかも知れぬが〕。前にも云ふ通り孔子〔/孔夫子〕の志は一に〔/一ら〕經國濟民に在つて切に王道の復興に存し〔て〕。毫も他を顧るに遑あらざりしなり〔/が如し〕。誠に老生の心事〔/此老人澁澤〕の如きも既に頽齡八十四歳に達したれば。閑地に在りて文墨を弄し、時に或は風月を楽しむ〔/閑境に退きて修身齊家の道でも講ずる〕位にしたら可からうと云はるゝ人もあらむかなれども〔/ん〕。併し余は敢て自ら僭して孔子〔/孔夫子〕に比するにはあらざれども、元來農民より浪人に轉ぜしも更に幕吏又は王臣と變じ終に實業家となりたるも一に國家奉仕の微衷より出でたるにて猶孔子が王道に汲々として〔/孔夫子が自ら出たら、其國の政治が改善せらるゝであらうと思ふて〕。何國からでも召されさへすれば。輒ち出て仕へたやうに。此老人も〔出て奔走すれば。或は〕少しでも世の爲め國の爲め何かの役に立つ事〔が〕あらば〔/うか〕と思ふのであります。故に教育事業も社会事業も經濟界の事柄も時に或は國際問題即ち亞米利加支那の關係にも様々の方面から參與して居るので〔/電燈問題が起れば之に手を出し。米國の問題が發すれば、之にも奔走し。支那問題が生ずれば之に顔を出したりするやうな事で〕あります。乃ち微意の存する所は前にも言ふたる孔子〔/孔夫子〕が其志に忠なりし所以のものを學んで、幾分にてても〔/多少なりとも〕國家民人の幸福増進〔の途〕に〔向つて〕貢獻したいと云ふ精神に外ならないのであります。

i ない：《稿本》ぬ

この段は『実験論語处世談』11頁の「◎渋谷にも孔子の志あり」（大正4年6月掲載）の章に拠る。特に注意すべき渋谷の書き入れはない。經濟界以外にも教育・社会事業に貢献したことを付け加えているのは、大正5年喜寿を機に財界第一線を

退いてのち、二松学舎との関わりをはじめ、こちらの方面にもより力を注いだことを回顧してのことであろう。

【7】 侂又〔さて〕孔子〔孔夫子〕は如何なる人なりやと問はば〔/の人となりは〕。一言にして概説すれ〔/言へ〕ば其常識〔の〕非常に發達して〔/たる〕知能多方面に具備したる頗る圓滿の人なりと云ふを〔/が〕適評とするのである〔/ならん〕。古來世の所謂英雄〔や〕豪傑は常人に卓越したる特色〔や〕長所の〔/が〕あると。同時に〔非常なる〕缺點や短所も**多くあるが**〔/あるものである〕。〔而るに〕孔子〔孔夫子〕に至つては**毫も其缺點**〔/特別なる長所と言ふべき所なき代りに。是ぞといふ〕短所は〔/も〕ないのである。故に之を稱して偉大なる平凡人と云ふを〔/ても〕適當とする〔/であらう〕。而して孔子も又自ら曰く。吾れわかき時賤し故に鄙事に多能なりと。蓋し當時の世態に於て事細大となく〔/世の中の事〕大抵通曉せざるはなかりしならむ。史記世家に六藝に通ずとあり。六藝とは弓を射馬を御し字を書き算術をなし禮を行ひ樂を奏する事を指して曰ふ。即ち何事にも**天才ありて**堪能なりし事推して知るべし。後年に至り春秋を著はされたるを見れば。歴史の造詣も亦深かりしならむ〔/こと知るべき也〕。總じて人は曠世非凡の人傑たる**大英雄**大宗教杯には**絶対に企及すべからず**〔/然らば則ち人は釋迦や耶蘇たる事は難し〕とするも。**圓滿無碍**の孔子たる事は甚だ難き事にはあらざるべし。〔何となれば吾人は非凡の釋迦や耶蘇たる事能はざるまでも。平凡の發達したる孔子たり得べからざる理なければなり。〕**唯終身能く勉めて倦まざるに在るのみ**〔/唯勉めて倦まざるに在るのみ〕。要するに孔子は**精強博敏**萬事に**通曉**〔/精通〕して〔圓滿無碍の人である〕。而して聊も倨傲又は怠^{ママ}瀆の心なく其發達したる常識を以て終世人事を盡くせし人〔/即ち常識の非常に暢達した方〕である。是を以て余は深く孔子に學んで其教〔訓〕を循守すれば〔/して往けば〕。家に處し世〔間〕に出でて非難せられざる〔熟達圓滿〕の人〔物〕になり得らるゝ〔もの〕と信ずるなり。

この段は『実験論語処世談』12頁の「◎圓滿なる孔夫子」の章に拠る。『実験論語処世談』では最後に新注古注の解説があるが、すでに述べられているので割愛されている。

渋沢が削除した釈迦や耶蘇にはなれぬというくだりは『実験論語処世談』にもない。ここも尾立の筆による潤色であろう。

ちなみに孔子を偉大なる平凡人と評したのは渋沢が最初ではない。渋沢自身、

『実験論語処世談』840頁で最初の孔子祭典会（明治40年4月28日）の講演で井上哲次郎⁽¹⁶⁾が孔子を「偉大なる平凡の人」と評したと記している。

【8】[孔子の教は宗教なりや。] 孔子は儒教の大宗なり。而して[/孔子の教即ち] 儒教は宗教なりや否の問題は。識者の研究する所なり[/論語の如何なるものであるかを講義する前に。先づ以て之を研究せざるべからず]。曩に文學博士井上哲次郎氏は。孔子の教は宗教に近き所ありと道破せしも[/半ば宗教で。少くとも宗教らしい所があると喝破し]。[之に對して] 法學博士阪谷芳郎⁽¹⁷⁾氏は。全然宗教にあらず。仁義道德を唱道して之を實踐躬行したる[/單に實踐道德を説かれた] に過ぎずと言はれたり[/駁論しき]。就て余は以爲らく。論語子罕篇に。

天之將喪斯文也。後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也。匡人其如予何。

（天の將に斯の文を喪ぼさんとするや。後れて死する者は。斯文に與ることを得ず。天の未だ斯の文を亡ぼさざるや。匡の人夫れ予れを如何せむ。）

と斷言されたり[/あり]。蓋し『斯文』とは。當時孔子が[之を其時] 世人[/人] に教へ、又後世に貽さんとする『先王の道』を指したのである。即ち此章の意は。若し天が先王の道を滅さんとする[意] ならば。予れ（孔子）或は匡[の國の] 人の手に[罹りて] 殺さるゝかも知れぬ。然れども予が未だ予の事業の卒らぬ中に殺さるれば[/れてしまへば]。後世の者は先王の道たる『斯文』を知ること能はざるに至るべし[/きを以て]、故に天が先王の道を亡ぼしたくないならば[/との天意あらば]。『斯文』を傳ふるを以て天職とする予は。決して匡人輩の手を以て殺し得べき筈がないと云ふのである。即ち茲に孔子が天に對する信仰を言明して居る。其外爲政篇に『五十而知天命。』八佾篇に『獲罪於天無所禱也。』公冶長篇に『夫子之言。性與天道。不可得而聞也已矣。』雍也篇の『予所否者。天厭之。天厭之。』述而篇に『天生德於予。桓魋其如予何。』泰伯篇に『堯之爲君也。巍々乎。唯天爲大。』憲問篇に『不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。』陽貨篇に『天何言哉四時行焉。百物生焉。天何言哉。』など論語全篇を通覧するに。天に言及した所が九ヶ所ばかりある。殊に八佾篇の『罪を天に獲れば禱る所無し』と明言せられたるに徴すれば、孔子が[天を] 深く天を信[じ、之を其信條と] せられたのは[/事] [自ら] 明かであるから[。則] 孔子の教は[槌に半は] 一の宗教なりと斷定せる井上博士の説も尤もな所がある。之に反對する阪谷博士の説は。凡そ宗教[といふ宗教] には必ず祈禱禮拜の形式を備へざるは無し。而るに孔子教即ち儒教には此形式を備へず。故に之を宗教視すべからずといふに在り。未だ遽かにその當否[/

是非」を断定すべからずと雖も。余は儒教を以て宗教なりとは信じて居らず。唯實際身を修め世に處するに方つて。人の人たるべき規矩準繩を説き視めされたる教として之を循守し。論語の所説に従ふて實踐躬行を努めて怠らざるのみである。

儒教が宗教か否かの議論である。この段の「即ち茲に孔子が天に對する信仰を……」の前までは『実験論語処世談』7頁の「◎孔子教は宗教なりや」を、以下はそれに続く同8頁の「◎論語に九ヶ所の天」の章をほぼそのまま書き改めたものである。渋沢がやや長く書き改めている箇所も、もともと『実験論語処世談』の言葉であり、尾立の筆ではない。

【9】 さて孔子教は宗教とは信じて居らざるに拘はらず。何が故に斯く孔子の論語に親しみ。之を處世上唯一の信條となし。八十四歳の今日まで日常生活の標準〔/規矩準繩〕となしたる乎と云へば。是には余が幼少の時より受けた教育から申述べならぬ事がある。明治維新前は京都〔/京師〕も江戸も乃至は諸侯の國々も。上流社會はすべて漢籍を以て教育を施し。余の郷里にても〔/武州にては。〕多少資産ある農民の家にては少年〔/初心の輩〕には先づ〔千字文〕三字經の類を授け。それより四書を讀ませ五經に移り。文章〔物〕では文章軌範とか唐宋八大家文の如きものを讀み。歴史は國史略支那の十八史略或は史記漢書の類を讀むを常としき。余は七歳の時に實父より三字經を教へられ。次に從兄の尾高藍香〔/蘭香〕より大學、中庸、論語、孟子の〔四書〕句讀を授けられ。〔其從兄の妹を後に娶つて荊妻となした因縁にも依りて、〕論語に親しむ發端を開いたのである。

『実験論語処世談』冒頭第1頁の「◎論語に親むに至れる因縁」に拠る。前段**【8】**と繋げるための一文を除けば、ほぼ出入りなく同じ。渋沢は幼少時に受けた教育については『雨夜譚』をはじめ、いろいろなところで話し記録されているが、自明のこととはいえ、自分の受けた教育が富裕層のものであったことを明確にしているのはこの書き入れだけかと思われる。

【10】 〔抑々〕均しく儒教を奉ずるにしても、大學もあり中庸もあるに〔之を捨て〕。獨り論語を選んで遵奉するは。何ぞやと曰るゝ人もあらん。余が論語を選択して一生恪守〔/恪循〕すべき規準となしたるは。大學は其開卷第一に明言するが如く政治〔/治國平天下の道〕を説くを主眼とし。修身齊家よりも寧ろ治國平天下を教旨〔/政治に關する教誨を重し〕として居る。中庸は又〔/更に一層〕高い見地に立つ

て。「致中和。天地位焉。萬物育焉。」などの悠遠なる説があつて、哲學に近く。修身齊家の道には遠ざかり居るが如し。而るに論語に至つては。一言一句悉く是れ日常處世上の實際に應用し得る教である。朝に之を聞き夕べに之を實行し得るのである〔/底の道を説て居る〕〈。〉是れ余が孔夫子の儒教を遵奉するに膺り學庸に據らず。特に論語を選び拳々服膺して、終生敢て〔或は〕之に悖らざらん事を期する所以である。余は論語の教訓を守つて行けば。人は能く身を修め家を齊へ。安穩無事に世を渡つて往けるものと確信するのである。

この部分も『実験論語処世談』では前段に続く「◎何故論語を選める耶」に拠るもので、文章もほぼ同じ。『実験論語処世談』では引用されている大学冒頭の句や、中庸の哲学的の例として引かれる「鳶飛戾天，魚躍于淵」が省略されている程度である。

【11】余は明治六年に官を退き、身を實業に委ねる事になつた。而して國を強くするには、先づ國を富まさざるべからず〈。〉國を富ますには、〔先づ〕農工商の實業を隆盛ならしめざるべからず。就中余は商工業を隆盛ならしむるには。小資本を集めて大資本となす合本主義を行ひ。即ち會社組織に據らざるべからずと信じて、敢て第一銀行を組織し其他各種の會社組織に微力を盡したのである。抑々會社を経営するには。第一に必要なは之を経営する人物の如何にあるのである。其當局者に相當の人物を得ざれば。其會社は必らず失敗に終るべし。明治の初めに政府の創設したる**商社**〔/開拓會社とか〕爲替會社**杯**〔/とか〕云ふものが。大抵倒壊したのは即ち其適例である。是に於て余は銀行や會社を〔失敗なく〕成功せしむるには。其事に任ずる人〔/當局者〕をして。事業上又は一身上**恪守**〔/恪循〕するに足る規矩準繩がなければならぬと考へたのである。

この段も同じく『実験論語処世談』でも前段に続く「◎論語を實踐躬行す」の後ろ三分の二位を書き改めたものである。省略された三分の一の部分には、渋沢邸で宇野哲人に論語の講義をお願いしていること、自身は論語の教えを實踐してきたという自負があるということが記されている。『実験論語処世談』では「この方面に力を注ぐことにしたのである。」と簡単に済ませているのを「敢て第一銀行を組織し其他各種の會社組織に微力を盡したのである。」と具体的に敷衍したのは尾立の筆である。

【12】余は佛教の知識なく耶蘇教も〔/に至ては更に〕知る所がない。そこで余が實業界に立ちて自ら守るべき規矩準繩は〔之を佛耶の二教に取ること能はず。而かも〕儒教ならば不十分ながら幼少の時から父兄より受けた〔/より親んで來た〕關係も〔/が〕あり。特に論語は日常身を持し世に處する方法を〔一々〕詳示せられて居るを以て。之に依據しさへすれば。人の人たる道に戻らず。萬事無碍圓通し、〔何事にてても判斷に苦しむ所があれば、論語の尺度を取つて之を律すれば、〕必ず過ちなき〔/を免かるゝ〕に至らんと確信し〔/確く信じ〕たり。〔我邦には應神天皇の朝以來〕斯る尊き尺度〔が傳來し居るに。之〕を高閣に束ねて〔顧みず〕。範を他に覓めんとするは心得違の事なりとして〔/にあらずや〕。〔余は斯く信じて〕論語の教訓を金科玉條と定め〔/し〕。拳々服膺して之が實踐躬行を怠らぬのである。實業家の循守すべき論語の教訓は。一にして足らずと雖も就中里仁篇の

富與貴。是人之所欲也。不以其道。得之不處也。貧與賤。是人之所惡也。不以其道。得之不去也。（富と貴とは是れ人の欲する所也。されど其道を以てせざれば之を得るも居らず。貧と賤とは是れ人の惡む所也。されど其道を以てせざれば之を得るも去らず。）

のごとき其一例である。又同じ篇に。

放於利而行多怨。（利に依つて行へば怨多し）

の句がある是れは實業家の終身遵奉〔/恪遵〕すべき明教である〔/にあらずや〕。凡そ社會〔/人生〕の生活に先つものは〔財産〕金錢であつて〔/也〕。人は之れなければ一日も立行かざるべし。其〔/人の〕地位も〔亦然り。成るべく上流に立たねば、世の信用少く〕信用も思ふ事も就らざるべし。されど正當の道に依らず〔無理を〕して得たる貨財〔/富や〕又は其地位は多くは永續のせぬものなり〔/ぞかし〕。又〔/此反對にて〕如何に貧窮しても〔又如何に〕下賤の地位に居るもそれが〔自然に來れる〕自己の運命と〔/ならば。致方なしと〕觀念して善行を積むならば自然と〔/より外に致方なし。無理に〕其境界を擺脫するに至らむ〔/せんとすれば。必らず法を犯し人を害する底の惡業に陥るべし〕。之に反して私欲〔/自己の利益〕のみを主眼として行動〔/行作〕すれば。必らず他人の怨恨する所となりて却て成功はせざるなり〔非命に斃るゝこともあるべし〕。是等の教旨〔/教訓〕は實に吾人の日常服膺〔遵奉〕すべき好箇の明訓ではあるまいか。

2つ目の引用の次の行、「……すべき明教にあらずや」までは『実験論語処世談』の前段に続く「◎論語主義は明治六年より」の章のほぼそのままの書き写しである。

途中『実験論語処世談』にはない「我邦には應神天皇の朝以來」という尾立の筆がまた加えられるが、渋谷は塗抹する。「……すべき明教にあらずや」以降の部分については、下敷きにしたと思われる『実験論語処世談』の文章はない。他にも管見の及ぶ限りでは渋谷の文章は見つからない。尾立の創作にかかるものであろう。

この部分、貧困者に対して、尾立の起草、すなわち現行の『論語講義』では、

如何に貧窮しても又如何に下賤の地位に居るもそれが自然に來れる運命ならば。致方なしと觀念して善行を積むより外に致方なし。無理に其境界を擺脫せんとすれば。必らず法を犯し人を害する底の悪業に陥るべし。自己の利益のみを主眼として行作すれば。必らず他人の怨恨する所となり非命に斃るゝこともあるべし。

と、突き放すように手厳しく、恐ろしげな言葉が並ぶ。いかにも元檢察長官という感を抱かせる。他方、渋谷の書き入れを反映させると、

如何に貧窮しても下賤の地位に居るもそれが自己の運命と觀念して善行を積むならば自然と其境界を擺脫するに至らむ。之に反して私欲のみを主眼として行動すれば。必らず他人の怨恨する所となりて却て成功はせざるなり。

となり、積善による貧窮脱出の希望を説き、尾立との眼差しの差は明かである。渋谷が誤解されかねない箇所ではなかろうか。

【13】總説の終りに臨み一言せざるべからざるものは、**道德**〔儒教〕と**經濟**との合致〔即ち教と行と合一不二の物となす事〕である。〔儒教即ち〕孔子の教は固より紙上の空談〔高論〕にあらず。一々之を日常生活の上に實行すべき道である。人は血液の循環する生物なれば、衣食住の欲求なかるべからず。衣食住の給與は則ち經濟の道に依らざるべからず。**故に道義**〔/人道〕も**禮節**も**經濟**を離れて行はるべきものにあらず。**既**〔/故〕に衣食足而知**禮節**と**管仲さへも訓示せられたり**〔/の古訓あり〕。食ふ事も衣る事もⁱ出来ぬ人に向つて仁義忠孝の道を行へ**禮儀作法に従えと教るも其効なかるべし**〔/を行へと言ふ事は出来まい〕。**是を以て**〔/今〕論語の説く所は悉く人間實際の生活を離れず。**道德**〔/名教〕と**經濟**〔/實用〕とを一致合同して居るが、宋儒の程子や朱子は〔/の解釋〕高遠の理學に馳せて、**終に**〔少々〕實際の行事に遠ざかるに至れり。我邦の儒家藤原惺窩、林羅山の如きも宋儒の弊を承けて。學問と實際とを別物視し。物徂徠に至ては**道**〔/學問〕は士大夫以上の修むべきものなりと**放言**〔/明言〕して。農工商の實業家をは圈外に排斥したりき。

徳川氏三百年の教育は。此主義に立脚したりしかば。書を読み**學理を講ずる**〔/文を學ぶ〕は實業に與らざる士人の業となり。農工商多數の國民は國家の基礎たる**經濟界**〔/諸般の實業〕を擔任すれども、書を読まず文を學ばずして無智文盲漢となり了りぬ。因習の久しき〔習ひ性となり〕。事業と學問とは全く別物となりて人敢て恠まず。士は高く**居**〔/止〕りて農工商を下民と賤しみ。農工商も**直接の生産殖利に汲々として學理を講究するを勉めず**〔/は士人の自活自存する道を知らざるを嘲りて、青表紙讀み四角の文字知りと罵れり〕。人類の均しく服膺すべき論語の明教を。獨り少數士人〔の教訓〕に委したるは。惜みても猶惜むべき事といふべし〔/ぞかし〕。**惟ふに**〔/余は堅く信ず。〕學問は**單に道を説く**〔/學問の〕爲めのみの學問にあらずして。人間日常生活の指南車たらんが爲めの學問なり。即ち學問は人生處世上の規準也。故に實際を離れたる學問なきと同時に。學問を離れたる**實際**〔/實業〕も亦存せざる也。是を以て余は平生論語と算盤説を唱へて實業を論語に一致せしめんと企圖し。余が**尊敬**〔/尊信〕する故三島中洲先生とは常に之を協議したり〔/は同工異曲とでも云ふべきか。論語を經濟に合一せしめんと説かれき〕。

而して〔/之を要するに〕中洲先生も**能く余が意を諒とせられ**〔/余も共に〕學問と事業とを〔結び付けて、〕睽離せしめず以て知行合一の極致に到達せんと**企圖**されたり〔/欲するなり〕。余は實に此知行合一の**主義に據りて**〔/見地に立ちて〕、〔論語を咀嚼し〕八十四歳の今日まで**道德經濟合一説を**〔/公私内外の〕規準として〔遵奉し〕、國を富まし國ⁱⁱを強くし以て天下を平かにするに努力したり。而して他の〔/他の同胞〕實業家諸氏にも**能く論語を讀みて實業を經營し所謂**〔/能く讀て貰ひ。民間に〕知行合一の**當業者**〔/實業家〕續々輩出して。**實業界の品位愈高遠に其實力益鞏固なる**〔/品位の高き先覺者が出現せん〕事を望むのである。〔是を以て余は不學にして。固より専門の漢學者にあらざれども敢て自ら揣らず。茲に論語の講義をなさんと欲す。大方の諸士幸に余の謏劣を咎めず。愛讀の榮を賜り共に與に東洋の仁義道德を鼓吹して身を修め世に處する規矩準繩となされん事を願ふのみ。〕ⁱⁱⁱ**再説**〔/重ねて一言〕すれば**道德は經濟**〔/名教學術は實業〕に依つて**發展し**〔/貴く〕、**經濟**〔/農工商の實業〕は〔名教〕道德に依つて**光輝を増すのである**〔/光を發す〕。〔二者固より一致にして。決して相睽離する事を許さず。〕若し二者睽離せんか。〔學問は死物となり。名教も〕道德も紙上の**空論**〔/空談〕となり。論語讀の論語知らずと曰はるゝに至るべし。又農工商〔人〕は思想低下の賤丈夫となり。**品格**〔/光輝〕なき實業となり了らむ〔/ん〕。是を以て二者を一致せしめ。知行合一の境に達せしめざるべからざるなり〔/ん事を願ふて息まず〕。^{iv}此主義を〔抱き

八十年來の實驗に據つて」以て敢て論語^vを講説^{vi}す。而かも余は多忙の身にして躬ら筆を執る事能はざるが故に口話して尾立維孝氏之を筆述する事となしぬく。讀者請ふ之を諒せよ。

- i 衣る事も：《稿本》なし ii 《稿本》は尾立朱筆で「兵」に改む。印刷は「國」。
- iii { }は尾立が朱線削除しているが、《講義録》では印刷されている。
- iv 《稿本》尾立朱筆加筆あり「余は不學にして固より専門の漢學者にあらざれども」（渋沢「不學にして」「漢」を抹消）
- v 《稿本》尾立朱筆加筆あり「の大意」
- vi 《稿本》尾立朱筆加筆あり「せんとす。而かも驢事馬事蝟集して。自ら筆を執ること能はず。故に口述して尾立維孝氏に筆記せしむ。」（渋沢「驢事馬事蝟集して。」を「多忙」に改める）按ずるにiiiで削除した分をiv v viで書き加えたが、印刷原稿にする際にiiiを復活してiv v viを修正し、《講義録》のような文章になったと思われる。

最後に渋沢の持論「道德經濟合一説」を展開して総説を締めくくる。この部分についても、言い回しや語句については『実験論語処世談』6頁「維新前の商工業者」の章など類似するものは認められるが、まとまって下敷きとしたと見られる文章は前段後半と同じく、『実験論語処世談』や他の渋沢の主だった著作には見つからない。やはり尾立の起草になるものか。

おわりに

渋沢の自叙伝といえは、『雨夜譚』および、これに基づくものが幾つもあるが、それは渋沢還暦（明治32年1899）の頃の視点からの回想である。『実験論語処世談』は大正4年（1915）から連載が始まり、それから更に15年後の回想になる。《講義録》の始まりは『実験論語処世談』の最後と半年の間をおいて踵を接するとはいへ、『実験論語処世談』の最初とは約8年の間がある。渋沢は74歳から83歳になった。この間、喜寿を境に実業界の第一線を退いた。『二松学舎講義録』の刊行の始まった大正12年には大震災もあった。『実験論語処世談』の頃ともまた異なった境涯にあったのではなからうか。財界活動期の渋沢の言辞こそが渋沢の思想という見方もあるが、『論語講義』の原稿への書き入れから、一線を退いた老境からの視点を考察することもそれなりに意義があろう。また、起草者尾立維孝の人格が『論語講義』には見え隠れしていること、見て来たように、総説部分の考察だけでも明かである。今後も『論語講義』原稿の渋沢書き入れの考察を続けたい。

注

1. 渋沢栄一伝記資料刊行会『渋沢栄一伝記資料』別巻第41巻, 1962(以下『伝記資料』と略す)《講義録》刊行期間の大正12年の日記帳は3月7日以降年末まで未記入。大正13年分は原本欠。大正14年の日記帳は4月11日以降年末まで未記入。
2. 三島復(中洲の三男)に代わり大正8年より。同時に舎長であった三島復は初代学長に就任, 大正13年2月没。
3. 尾立維孝の経歴と人物については前号掲載拙稿参照。
4. 稀に, てにをはなどの修正に渋沢の訂正が反映されているように見える場合がある。前稿でも述べたが, 《稿本》から版組までの間に, この《稿本》からさらに版組用原稿用紙に転写し, 総ルビや割り付けの指示を書き込むという作業があった。その過程でも手直しが行われており, 尾立の原稿の文字と印刷の文字の間に異同が認められる。この手直しと渋沢の書き入りが偶然一致したものであろう。
5. 三島毅『論語講義』例言の4参照。
6. 省かれた部分は2箇所。一つは「円珠経」という論語の異名についての記述。もう一つは, 書名「論語」についての猪飼敬所の説。孔子と弟子の論説の語だから論語というだけのことで, 論が何だ, 語が何だという詮索は無用, というもの。
7. 竹厓の論語関係著作としては「論語講義」30巻「論語説約」70巻がある。未見。
8. 《新版》は「……故にこれを名づけて語という。」までを竹厓の語としている。
9. 安達大寿計編, 大正11(1922)年11月, 宣伝社。
10. 佐藤一斎『論語欄外書』成於有子曾子之門人 一斎の原文は漢文。三島『論語講義』では書き下し文。
11. 三島『論語講義』では一斎の引用を途中で改段落してしまっているので, 読みようによっては段落前までが一斎の引用, 段落以後(引用される部分は段落以後)は三島の所説というように読めないこともない。
12. 『佐藤一斎全集』第6巻 1994, 明德出版社 解説。
13. 本稿でのページは『実験論語処世談』1922(大正11), 実業之世界社 に拠る。
14. 大正8年8月に青柳が病を得たあと, 担当が交代した。日記からは速記者もいたことが窺える。
15. 『渋沢栄一伝記資料』第41巻 357頁。
16. (1856-1944) 東京帝国大学哲学科教授 渋沢とは交友が深く, 井上はその著『懐旧録』で「子爵は只の金持になるにはあまりに教養の程度が高かった」と渋沢を評している。
17. (1863-1941) 法学博士。大蔵大臣, 東京市長, 貴族院議員等を歴任。渋沢の次女琴子の夫。